

## 雷火鍼法について

上田 善信

日本鍼灸研究会

## はじめに

雷火鍼法は雷火神鍼とも称し、昨年発表した神灯照法と同様に明代に始められた艾條灸の一種である。『鍼灸逢源』巻三に所載する「孫真人雷火鍼法」は、孫思邈には直接関係はなく単に仮託したものにすぎない。また灸法であるにもかかわらず鍼法と称する理由として、劉冠軍『中国灸法集要』や賀普仁『灸具灸法』では、施灸の方法が恰も患部に鍼をしているように見えるから、と解説している。

雷火鍼法の初出については、項立てはしていないが『神農皇帝真伝鍼灸経』に「一名火雷鍼、一名神聖鍼、一名麝火鍼」とあり、本書の成立からみると明・嘉靖年間には用いられていたと思われる。

本灸法は、太乙神鍼の前身にあたる灸法で、艾絨に薬剤を加え紙で包み爆竹のような円筒状にした艾條の一端に火を着け、患部或いは穴に触接するので触接灸とも称し、現在では『鍼灸大成』に基づくものが比較的多く用いられている。

## 施灸の目的

雷火鍼法を用いる病證やその目的について、『本草綱目』巻六・神鍼火に「心腹冷痛，風寒湿痺，附骨陰疽を主治す。凡そ筋骨に在りて隠痛する者は、之に鍼し火氣病所に直達すれば甚だ效あり」とあり、『鍼灸大成』巻九・雷火鍼法には「閃挫，諸骨間痛，寒湿の氣及びて刺すことを畏れる者を治す」とあり、また『景岳全書』巻五十一・雷火鍼五四には「風寒湿毒の氣，経絡に溜滞し，而して痛を為し腫を為して散ぜざる者を治す」とあり、薬氣を経絡に衝入させることにより痛みや腫れを緩解させるもので、外科疾患だけではなく、打撲，ぎっくり腰，腹痛，下痢，風寒湿痺等に用いられている。

## 施灸方法

雷火鍼法で艾絨に加える薬剤は『外科正宗』の3種から『古今医統大全』の19種まで数も種類も異同が多く一定していないが、『鍼灸大成』巻九・雷火鍼法に由来する「沈香，木香，乳香，茵陳，羌活，乾薑，川山甲各三錢，麝香少し許り，蕪艾二両を用いる」に準ずるものが比較的多く、施灸方法も同書の「綿紙半尺を以て先ず鋪げ，上に艾を茵し，次に薬末を將て摻捲し，極めて緊く収用す。按じて痛穴を定め，筆にて点記し，外に紙を六七層用いて穴を隔て，卷艾葉を將ゆ，雷火鍼と名づくるなり。太陽の真火を取るに，圓珠火鏡を用いるは皆可なり，燃紅を穴上に按じ，良や久して取り起こし，灰を煎去し，再び焼き再び按じ，九次すれば即ち癒ゆ」が比較的多く用いられている。艾條の大きさについては、『本草綱目』巻六・神鍼火や『身経通考』巻四・方選・風痺門などにいう「如指大」のものが最も多く、長さは『本草綱目』巻六・神鍼火には「長三四寸」とあるが、『古今医統大全』巻九十七・造雷火鍼法の「長五寸」や、『鍼灸大成』に「半尺」とあるように15~16 cm程度であった。現在では30 cm四方の桑白紙で包んだものが用いられている。

施灸量については、『鍼灸大成』巻九では「九次即愈」、『種福堂公選良方』巻二・鍼灸・雷火鍼では「二三層」とあるが、『本草綱目』にいう「火氣，病所に直達す」や『身経通考』の「痛みを知らば則ち止む」というように、患者が温熱を感じる事が目安となっている。現在では一部位に10回，1，2秒程度触接する方法をとっている。

## 結語

本灸法の特徴は、皮膚に直接施灸したり，熏ずる方法ではなく，3枚~10枚の紙を用い（6，7枚の場合が多い）穴または患部の上に置き紙の上から触接施灸することである。また『古今医統大全』では「女人は衣を隔て，衣の上に紙三層を用ゆ」と注意を促している。この様な艾條灸は手技が簡便であり治療効果も比較的良く，患者の負担も軽く受けやすい灸法といえる。